

飛鳥寺塔心礎埋納品の考古学

諫早 直人

1. はじめに

飛鳥寺は法興寺、本元興寺とも呼ばれる日本最初の本格的な伽藍をもつ仏教寺院である。鎌倉時代の雷火によって創建時の伽藍は焼失してしまったが、『日本書紀』などの文献史料の記載によれば、587年に物部守屋を討滅する際に蘇我馬子が発願し、592年から寺院の建立が始まり、7世紀初頭には伽藍の中心部分が完成したとされる。実際、奈良国立文化財研究所による1956年から1957年の足かけ三次に及ぶ飛鳥寺跡の発掘調査では、木塔を中心に、周囲に三つの金堂を配置する一塔三金堂式という、いまだに国内では類例のない、特異な伽藍配置が明らかとなったほか、木塔跡の心礎上面からは593年の仏舎利埋納儀礼に伴うとみられる様々な器物が、一部は創建当初の位置を保った状態で出土した（奈良国立文化財研究所1958）。『日本書紀』推古天皇元年（593）条の「元年の春正月の壬寅の朔丙辰に、仏の舍利を以て法興寺の刹の柱の礎の中に置く。丁巳に、刹の柱を建つ」と対応する、日本最古の仏舎利埋納儀式の痕跡が姿を現したのである。

この飛鳥寺第一次～第三次調査は、調査完了から一年も経たない1958年の4月に報告書が刊行されている。1954年に決まった大和平野農業用水導水路工事の事前調査としておこなわれたこともあり、極めて短期間での刊行であったが、遺構については詳細な考察が加えられており、当時としては最高水準の調査・報告がおこなわれていることは、同時期に刊行された全国各地の報告書と見比べれば一目瞭然である。しかしながら報告書に「これらの遺物の整理は未だ緒に付いたばかりで、今後にまたねばならぬ問題が多い」（奈良国立文化財研究所1958：27）と明記されているように、遺物に関する記載は十分とはいがたく、いまだその正確な器種や数量は明らかとなっていない。

筆者は、奈良文化財研究所在職中の2014年より飛鳥資料館の石橋茂登氏らとともに飛鳥寺塔心礎埋納品の再整理作業に着手し、いくつかの埋納品について悉皆的な調査と報告に携わる機会を得た。すべての埋納品を網羅した遺物報告書刊行に向けた作業は現在も継続しているが、本稿ではそれらの近年の「再発掘」調査で得られている知見を紹介した上で、飛鳥寺塔心礎埋納品研究の到達点を確認し、今後に残された課題を明らかにしたい。

2. 飛鳥寺木塔の発掘調査と塔心礎埋納品

（1）飛鳥寺木塔の発掘調査

本題に入る前にまずは当時の発掘調査を簡単に振り返っておこう。飛鳥寺木塔の発掘調査はこれまでに二度実施されている。最初におこなわれた第一次調査（1956年）では、礎石は残っていなかっ

たが、基壇外装や階段の痕跡から一辺 12m の方形基壇であることが明らかとなった。それを受け実施された翌年（1957 年）の第三次調査で、塔基壇内部の調査をおこなったところ、基壇中央の直径 2 m の炭と灰の入り混じった黒い焼土を掘り始めてすぐ、深さ 60cm のところで花崗岩製の石櫃が出土した。石櫃は上下二つの石からなっており、上石をとりはずすと下石のなかには四角い木箱（舍利外容器）があり、その周囲の隙間からおびただしい量の遺物が出土した。このヒノキ製の木箱のなかには、創建当初の舍利莊嚴具の一部とみられるトンボ玉や琥珀片などとともに、新たに造りなおされたとみられる金銅製の舍利内容器が納められていた。

木箱の外側面には、上の行に「此本元興寺」「依建久七年」「歳次丙辰六月十七」「日曜火焼失畢」、下の行に「御庄司入阿」「寺僧玄昭明曉」「隆円賢」「賀行円玄曉」と、建久 7 年（1196）6 月 17 日に飛鳥寺が落雷により焼失したことや、村役人や六人の僧の名前が墨書きされていた。その内容は当時、東大寺の権大僧都であった弁暁が建久 8 年（1197）4 月 20 日付で書いた注進状の草案である『本元興寺塔下掘出御舍利縁起』の「建久八年三月廿四戊戌、大和國本元興寺の塔心柱下より掘り出し奉るところの御舍利其数百粒ならびに金銀器物等本縁の事」、つまり木塔が焼失した翌年の 3 月 24 日に、塔の心柱の下から舍利百余粒や金銀器物などが掘り出された、という記録と対応する。さらには注進状には書かれなかったその後の顛末、すなわち掘り出した舍利の一部を、新造した舍利容器に入れ、舍利莊嚴具の一部とともに木塔跡に再埋納していたことが木箱の墨書きによって判明したのである。

建久 8 年 3 月に掘削された南北 3 m、東西 8 m 以上の大きな長方形の発掘坑の底、深さ 2.7m のところで、一辺 2.4 ~ 2.6m ほどの心礎も検出された。残念ながら心礎中央に設けられた一辺 30cm、深さ 21cm の方形舍利孔の中身は鎌倉時代にすべてもちだされていて、その際のものとみられる燈明皿以外に何も出土しなかった。しかしながら、鎌倉時代に発掘の及ばなかった心礎の東隅から札甲（挂甲）が、西南隅から馬具や砥石などが創建当初の埋納状態を保ったまま出土したほか、上述の石櫃内にくわえて、鎌倉時代の発掘坑埋土からも創建当初のものとみられる大量の遺物が出土した。この一

連の発掘で出土した遺物が「飛鳥寺塔心礎埋納品」である。

（2）飛鳥寺塔心礎埋納品の概要

飛鳥寺木塔跡の発掘調査では実際に様々な遺物が出土しているが、その中には出土位置から埋納時期を特定できるものと、搅乱層（鎌倉時代の発掘坑埋土）から出土し、埋納時期を特定できないものが混在している。埋納時期については、推古天皇元年（593）に心礎舍利孔およびその周辺に埋納さ

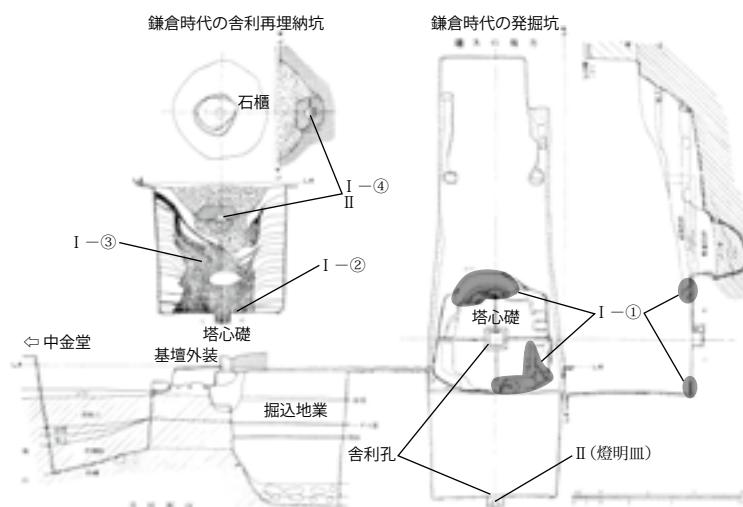


図 1 飛鳥寺塔心礎埋納品の出土状況（諫早 2017）

れたとみられるもの（I：推古天皇元年正月埋納品）と、建久8年（1197）3月24日以降に新たに埋納されたとみられるもの（II：鎌倉時代の埋納品）に大別することが可能である（図1、表1）（諫早2017）。埋納のタイミングはいずれも舍利埋納を含む一連の儀式の時以外に考えにくく、それ以外のタイミングで遺物が混入した形跡は確認されていない。

前者は出土状況から、以下の四つにさらに細分することが可能である。まずは心礎上面から埋納時の位置を保って出土したもので（I-①）、札甲や馬具、大型砥石、耳環、刀子、打出金具、ガラス小玉などがある。塔心礎埋納品をもとに創建当時の舍利埋納儀式を復元する上で、基準となる資料である。次は、心礎上面、鎌倉時代の発掘坑の最下面から出土した、耳環、刀子、雲母片、金・銀の延板・小粒などである（I-②）。その次は、鎌倉時代の発掘坑の埋土のなかから出土した、耳環、刀子、各種玉類、金・銀の延板・小粒、歩搖などである（I-③）。そして最後が、鎌倉時代に舍利が再埋納された際に一緒に石櫃の中に納められたもので（I-④）、打出金具や各種玉類、歩搖、金銅鈴、琥珀片などが該当する。これらの中でI-①については、出土状況から確実に創建当初にまで遡ると考えられるが、I-②～④については原位置を動いており、鎌倉時代の遺物が混ざっている可能性もある。

なお、Iの埋納のタイミングについては、『日本書紀』推古天皇元年条に「元年の春正月の壬寅の朔丙辰に、仏の舍利を以て法興寺の刹の柱の礎の中に置く。丁巳に、刹の柱を建つ」とあるように、舍利が埋納された正月15日（A）と、翌日16日の心柱の立柱後（B）という二つの可能性があり、出土位置からみて後者の可能性が高いI-①については、舍利荘嚴具ではなく、地鎮具とみる意見もある（岡本2010など）。ただし、舍利孔に到底おさまらないサイズの大型砥石や札甲などはさておき、I-①に含まれる耳環や刀子、ガラス小玉といった小型品の多くが、舍利孔に納められていた可能性もあるI-②～④にも含まれていることからみても、AとBを厳密に区別することは困難である。

表1 飛鳥寺塔心礎埋納品（諫早2017）

品目	数量	出土状況
(I) 推古天皇元年（593年）正月埋納品		
札甲（挂甲）	鉄製 1領	①
馬鈴	青銅製 1	①
蛇行状鉄器	鉄製 1	①
大型砥石	石製 1	①
鍔付半球形金具	金銅製 2	①
耳環	金銅製 29	①～③
刀子	鉄製 11	①～③
円形打出金具	金銅製 14	①・④
杏葉形打出金具	金銅製 28以上	①・④
玉類	— 計2382	①・③・④
	紺色 1493	①・③・④
	青色 251	①・③・④
ガラス小玉	緑色 231	①・③・④
	淡紫色 60	①・③・④
	黄色 289	①・③・④
	赤色 39	①・③・④
勾玉	ヒスイ製 2	③・④
	瑪瑙製 1	③・④
	ガラス製 1	③・④
管玉	碧玉製 5	③・④
切子玉	水晶製 2	③・④
空玉	銀製 3	③・④
山梶玉	銀製 1	③・④
丸玉	赤瑪瑙製 1	③・④
トンボ玉	ガラス製 3	④
雲母片	鉱物 数個	②
金延板	金製 7	②・③
金小粒	金製 1	②・③
銀延板	銀製 5	②・③
銀小粒	銀製 7	②・③
歩搖	金銅製 146以上	③・④
金銅鈴	金銅製 7	④
琥珀片（琥珀玉）	鉱物 200	④
蓋石片	凝灰岩製 4	②
(II) 鎌倉時代（1197年3月24日以降）の埋納品		
舍利容器	金銅製 1	—
舍利容器外箱	ヒノキ製 1	—
燈明皿	土製 1	—

*『飛鳥寺発掘調査報告』（1958年、奈文研）などをもとに作成。

3. 飛鳥寺塔心礎埋納品の「再発掘」

飛鳥寺塔心礎埋納品を取り扱った研究は枚挙に暇がないが、その多くは報告書の記載に依拠するものであった。近年、忠清南道扶余王興寺木塔（577年）、全羅北道益山弥勒寺西石塔（639年）という飛鳥寺を前後して建てられた百濟の大寺院において、創建当初の舍利莊嚴儀礼がそのままのかたちで姿を現したことを受け（国立扶余文化財研究所2009、国立文化財研究所2014）、飛鳥寺塔心礎埋納品との比較研究が盛んにおこなわれているが（鈴木（編）2010、諫早2017、向井2023など）、肝心の飛鳥寺の報告書が遺物報告としては未完成であったことは、冒頭で述べたとおりである。それに対し、近年、飛鳥資料館で進められている飛鳥寺塔心礎埋納品に対する再整理作業は、個別の品目ごとに悉皆的に進められており、また、当時はなしえなかつた最新の考古科学的調査がおこなわれている点でも、報告書の不足を補って余りあるものである。以下に詳しくみてみよう。

（1）玉類

玉類は、飛鳥寺塔心礎埋納品の中でも最も多く出土している遺物である。報告書の遺物記載によれば、「舍利容器と共に外箱の中にトンボ玉をはじめガラス玉」が、「外箱と石櫃との間の空隙にガラス玉大678個、小1952個」が納められていたようであり、このほかに勾玉4、管玉5、切子玉2、銀製空玉3、銀製山梔玉1、赤瑪瑙製丸玉1が出土している（奈良国立文化財研究所1958：23）。これらのうち、ガラス玉については近年、悉皆的な再整理と自然科学的分析が実施されており、約3000点のガラス玉およびガラス小玉片が確認できるという（石橋・田村2016）（表2）。田村朋美氏によればそれらの製作技法は引き伸ばし法、変則的な引き伸ばし法、鋳型法で全体の99.7%に達するが、連珠法によって製作された重層ガラス玉の破片や巻き付け法で製作されたと考えられるガラス小玉なども確認されている。また蛍光X線分析がおこなわれた結果、二次的な製作技法によるガラス玉類を除くすべてのガラス玉類がアルカリケイ酸塩ガラスであり、報告書に記載されていた鉛を融剤としたガラスは存在しないことが明らかとなっている。

以上の知見をもとに田村氏は「インド～東南アジア産と考えられる小玉（Group PI、Group SIIB、Group SIV）、メソポタミア～中央アジア産と考えられる植物灰ガラス小玉（Group SIIIB、Group SHIC、重層ガラス玉）、およびこれらのガラス小玉やその破損品を素材とし、鋳型を用いて再生したガラス小玉など、二次的に生産されたガラス玉から構成」されており、「いずれの種類についても、古墳時代後期末までに日本列島に流入したガラスである」ことから、「飛鳥寺塔心礎出土のガラス玉類は、創建時に埋納可能な種類から構成されており、すべて創建当初の埋納物であると判断される」と結論づけている（石橋・田村2016：12）。また百濟の王興寺舍利莊嚴具（国立扶余文化財研究所2009）にも「類似の形態と化学組成の特徴を有するガラス小玉」が含まれていることから、「東アジアにもたらされたこれら西方のガラス小玉は、6世紀後半ごろに百濟にもたらされ、最終的に『日本書紀』にみえる百濟国から献られた仏舍利に伴って飛鳥寺に到達したルートを想定することができるかもしれない」とする（石橋・田村2016：12-13）。

表2 飛鳥寺塔心礎出土ガラス玉類（石橋ほか 2024）

	製作技法	測定部位	基礎ガラス	色調	着色剤	重量 (mm)	点数				実形 (破片 総数)	
							実形		破片			
							分析済	未分析	分析済	未分析		
小玉 (一次的)	引き伸ばし	Group S I	鉛	コバルト	4.5~6.0	23	36	—	+	59 (+)		
	引き伸ばし		銅青	銅	3.0 (一部6.0)	294	98	—	—	392		
	引き伸ばし		濃青	銅+マンガン	2.0~3.0	430	348	—	180+	758 (180+)		
	引き伸ばし		銅①	銅+マンガン	4.0~5.0	18	3	—	—	23		
	引き伸ばし		銅②	銅	4.0~5.0	57	1	—	+	58 (+)		
	引き伸ばし		黄緑	鉛	2.0~3.0	5	—	—	10+	5 (10+)		
	引き伸ばし		黄緑	マンガン	2.0~3.0	14	—	—	—	14		
	引き伸ばし		黄	硫酸銅	3.0 (一部6.0)	256	136	—	20+	442 (20+)		
	引き伸ばし		黄緑	銅+硫酸銅	2.0~3.0	27	103	—	+	130 (+)		
	引き伸ばし		緑	酸化銅コロイド	2.0~3.0	17	—	—	+	17		
	引き伸ばし		赤褐色	金属性銅コロイド	3.5~4.0	2	—	—	—	2		
	引き伸ばし		白	不明	1.5~2.0	10	—	—	+	10		
	引き伸ばし		鉛	コバルト	2.5~3.0	2	—	—	+	2		
	引き伸ばし		鉛	コバルト	5.0~9.0	30	8	—	—	38		
	引き伸ばし		鉛	コバルト	5.0~6.0	9	2	—	—	11		
	変則的引き伸ばし	Group S II B	鉛	コバルト	5.0~9.5	481	17	—	—	498		
	変則的引き伸ばし		濃青	銅	—	26	—	—	—	26		
	変則的引き伸ばし		緑	マンガン	4.0~5.0	5	—	—	+	5		
	変則的引き伸ばし		黄	硫酸銅	5.0	4	—	1	+	4 (1)		
	変則的引き伸ばし		黄緑	銅+硫酸銅	4.5~5.0	1	—	—	—	1		
	変則的引き伸ばし		濃青	銅	5.0	1	—	—	—	1		
	重量過珠	Group S III	黄緑	鉛	—	—	—	2	—	(2)		
	鉛型		濃青	—	2.0~5.5	6	—	—	—	6		
	鉛型	Group S IV	濃青	—	2.0~5.5	2	—	—	—	2		
	鉛型		黒①	—	4.0~5.5	13	—	—	—	13		
	鉛型	Group S V	黒②	—	4.0~5.5	7	25	—	—	32		
	鉛型		黒	—	4.0~5.5	71	90	—	—	161		
	二次的巻き付け	Group S VI	鉛	—	10.0	3	1	—	—	4		
	二次的巻き付け		濃青	—	—	—	—	2	—	(1)		
小玉 (二次的)	トントボ玉 1+2	二次的「離着」	母玉	Group S VII	鉛	コバルト	16.0	—	—	—	2	
	埋め込み	斑点	Group S VII B	黄	硫酸銅	—						
トントボ玉 3	埋め込み	斑点	Group S VII B	黄緑	銅+硫酸銅	—	—	—	—	—	—	
	不明	母玉	Group S VIII	鉛	コバルト	11.5						
勾玉	不明	Group S VIII	濃青緑	鉛	11.5	—	—	1	—	1		

※1 田村類2016: 5頁をもとに作成した。

※2 縮小読み取り幅0.1mmのデジタルノギスを用いて計測した。

このほかにも整理過程で、材質不明とされてきた白色不透明の小玉 14 点について真珠の可能性が高いことも判明した。またその穿孔方法が古墳時代までの日本列島で製作された玉類にはみられない特殊なもので、正倉院の真珠玉と共に通することも明らかとなっている（田村 2017）。

(2) 馬具

馬鈴と蛇行状鉄器が心礎上面西南隅から 1 点ずつ出土している。馬鈴は青銅製の鋳造球形鈴で下部に文様を施文している（図2上段）。鈴子は川原石である。飛鳥寺例のような図文を配する鋳造球形の馬鈴は、和歌山県大谷古墳例など 5 世紀後葉～末には出現し、韓国の慶尚北道高靈池山洞 44 号墳 25 号石槨例や慶尚南道陝川玉田 M3 号墳例など大加耶を中心とする朝鮮半島南部から出土しており（図2下段）、初期のものについては加耶で製作されたものが含まれている可能性が高い。これに対し、6 世紀後葉に出現する珠文を密に充填するタイプは、飛鳥寺例のほかにも島根県岡田山 1 号墳例や香川県罐子塚古墳例、長野県小丸山古墳例など飛鳥寺と前後する時期の日本列島内では類例が散見されるが、大陸にはまだ類例をみず、日本列島内で製作された可能性が高い（諫早 2015）。蛍光 X 線分析がおこなわれており、銅、錫、鉛が顕著に認められ、銀、ヒ素、アンチモンを不純物として約 1

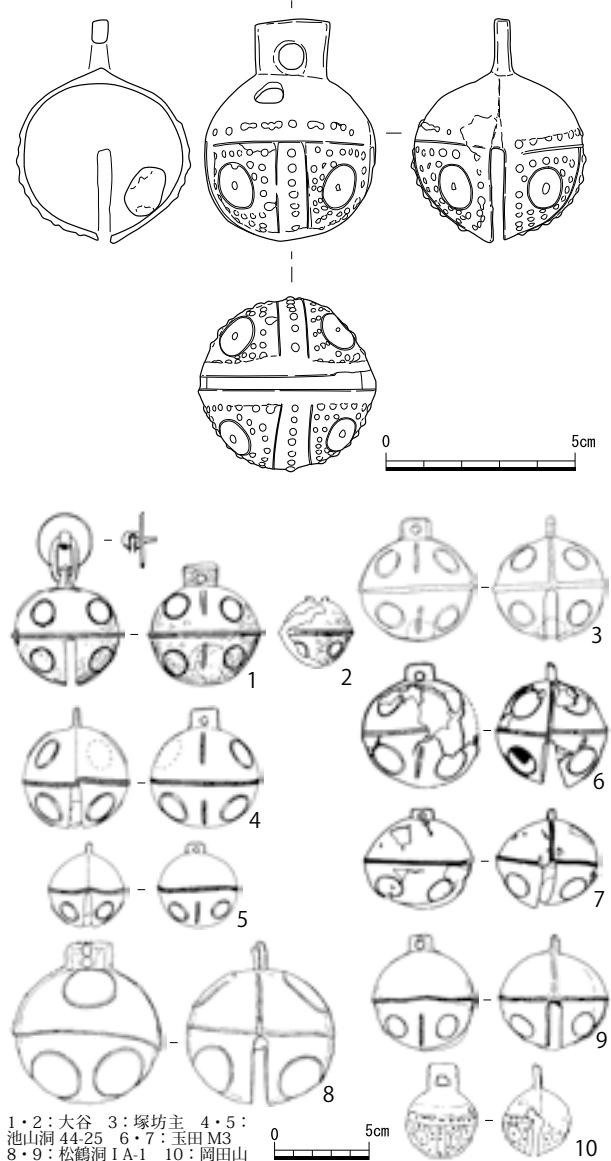


図2 飛鳥寺塔心礎出土馬鈴とその類例
(諫早2015) (上段:S=1/2、下段:S=1/4)

寺出土馬具をセットとしてみればその系譜は加耶に限定できるだろう。ただし、加耶では飛鳥寺で出土したような珠文を密に配する馬鈴や、U字形部材先端に方孔を穿ける蛇行状鉄器は確認されておらず、また加耶自体、562年に滅亡してしまうことをふまえれば、それらの製作は加耶系馬具を製作する倭の在来の工房においてなされた可能性が高い（諫早2015）。

(3) 刀子

少なくとも11口の刀子が埋納されたとみられるが、原位置を保って出土したものはない。刀身長15cm以上の大型品と10～15cmの中型品（刃幅1cm以上）、10cm未満の小型品（刃幅1cm未満）にわけられる（図4）。刀身は両関式が主体とみられ、全長や茎長などをみても同時期（古墳時代後期後半）の古墳副葬品との間に大きな違いは認められない。銀装刀子も1点出土しているが（図

～3%含むことが確認されている（降幡ほか2018）。

寄生の一部とみられる蛇行状鉄器は、日本列島で8遺跡、朝鮮半島南部で15遺跡⁽¹⁾からの出土が知られている（表3）。4世紀末の中国吉林省集安通溝12号墳の壁画に描かれているものが最も古く、高句麗を起点として朝鮮半島南部へ広がっていったものとみられる（東2011）。その構造は鞍への固定方法から後輪掛留式と居木打込式に大別され、飛鳥寺例のような袋部一体造の後輪掛留式は玉田M3号墳例や慶尚南道梁山夫婦塚例など5世紀後葉以降の加耶や新羅に認められ、福岡県大井三倉5号墳例など6世紀中葉～後葉には日本列島に伝わったものとみられる。日韓両地域で形態、製作技術に共通性が認められ、出現時期が遅れる日本列島の諸例は、舶載品あるいはその忠実な模倣品とみられる（諫早2015）。2018年に欠失部分も含めたレプリカが作成され、大井三倉5号墳例と同じような形態に復元されている（図3）（石橋・木村2018）。

飛鳥寺のように蛇行状鉄器に鋳造馬鈴が共伴する朝鮮半島の事例は、玉田M3号墳と慶尚南道固城松鶴洞1A-1号墳に限られ、飛鳥

表3 蛇行状鉄器一覧（諫早2015に加筆修正）

出土地	遺跡名	点数	装着方法	袋部	U字先端	屈曲数	馬具	時期	備考
倭 福岡	手光南2号墳	1	後輪掛留	別造	蕨手	6	○	6世紀後葉	
倭 福岡	大井三倉5号墳	1	後輪掛留	一体	蕨手	6	×	6世紀後葉	
倭 福岡	船原古墳遺物埋納坑	3	後輪掛留?	?	?	?	◎	6世紀末~7世紀初	未報告
倭 山口	塔ノ尾古墳	1	後輪掛留?	一体	円環?	6or8	○	6世紀中葉	複数の絵図が伝存
倭 岡山	穂崎字安部	1	欠失	一体	欠失	7以上	—	—	伝・朱手駄古墳出土
倭 奈良	团栗山古墳	1	後輪掛留	別造	欠失	6	◎	6世紀後葉	
倭 奈良	飛鳥寺塔心礎	1	後輪掛留	一体	方孔	5以上	◎	593年埋納	
倭 埼玉	埼玉將軍山古墳A	2	欠失	一体	欠失	6	◎	6世紀後葉	
	埼玉將軍山古墳B		後輪掛留	欠失	欠失	6			
加耶 高靈	池山洞518号墳	1	後輪掛留	一体	欠失	10	○	6世紀初	
加耶 陝川	玉田M3号墳A	2	後輪掛留	一体	円環	6	◎	5世紀後葉	
	玉田M3号墳B		後輪掛留	別造	円環	8			
加耶 陝川	礪溪堤夕A号墳	1	後輪掛留	一体	欠失	8	○	6世紀前葉	
加耶 南原	斗洛里1号墳	1	後輪掛留	一体	蕨手	6	○	6世紀前葉	
加耶 南原	月山里M5号墳	1	居木打込	一体	—	6	○	5世紀後葉	
加耶 晋州	玉峯7号墳	1	後輪掛留	一体	欠失	6	○	6世紀中葉	
加耶 晋州	水精峯2号墳	1	後輪掛留	別造	欠失	6	○	6世紀中葉	
加耶 固城	松鶴洞1A-1号墳	1	居木打込	一体	—	6	◎	6世紀前葉	
加耶 咸陽	衆生院1号墳	1	?	一体	?	8	○	6世紀初	
新羅 慶州	金冠塚	3	?	扇形	?	5以上	○	5世紀後葉	詳細不明
新羅 慶州	天馬塚A	3?	後輪掛留	花形	欠失	6?	○	6世紀初	Aは鉄地金銅張。ほかに扇形寄生あり
	天馬塚B		後輪掛留	欠失	欠失	3以上			
新羅 慶州	金鈴塚	1以上	?	?	?	3以上	○	6世紀前葉	詳細不明
新羅 梁山	梁山夫婦塚	1	後輪掛留	一体	蕨手	6	○	6世紀初	
新羅 昌寧	校洞89号墳(II群10号墳)	1	居木打込	欠失	—	3以上	○	5世紀後葉	
百濟 公州	公山城第9次I-5-3堅穴遺構	1	後輪掛留	一体	?	4	○	7世紀代	馬胄片と共に

*出土地不明品は除外した。○: そのほかにも馬具が出土（鑄造馬鈴が出土しているものは◎）。

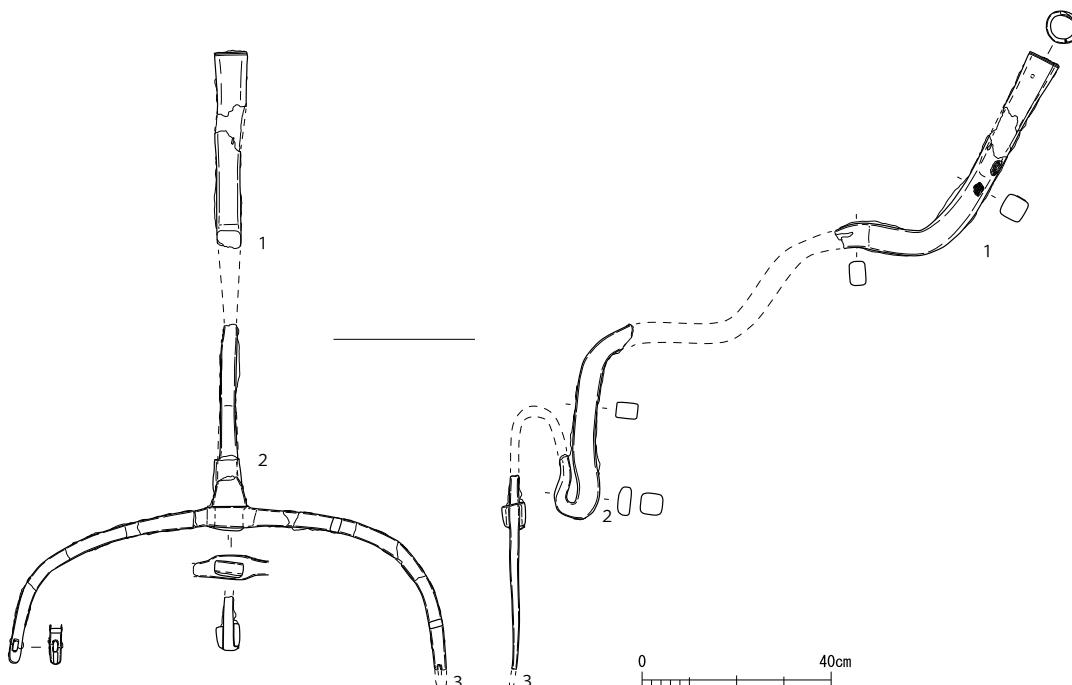


図3 飛鳥寺塔心礎出土蛇行状鉄器（石橋・木村をもとに作成 2018）(S=1/8)

4-9)、木製一本造りの柄に木製二枚合わせ鞘ないし皮革製袋鞘という組み合わせを基本とする簡素な外装が大部分である。

百濟の王興寺舍利莊嚴具にも大型1口、中型7口の刀子が含まれているが、一部の柄や鞘にヒノキと思われる針葉樹材が用いられていること（図4-2・15）、石製模造品などから遅くとも古墳時代前期後半には出現したとみられる皮革製袋鞘が採用されていることなどから（図4-3・5・6・8）、飛

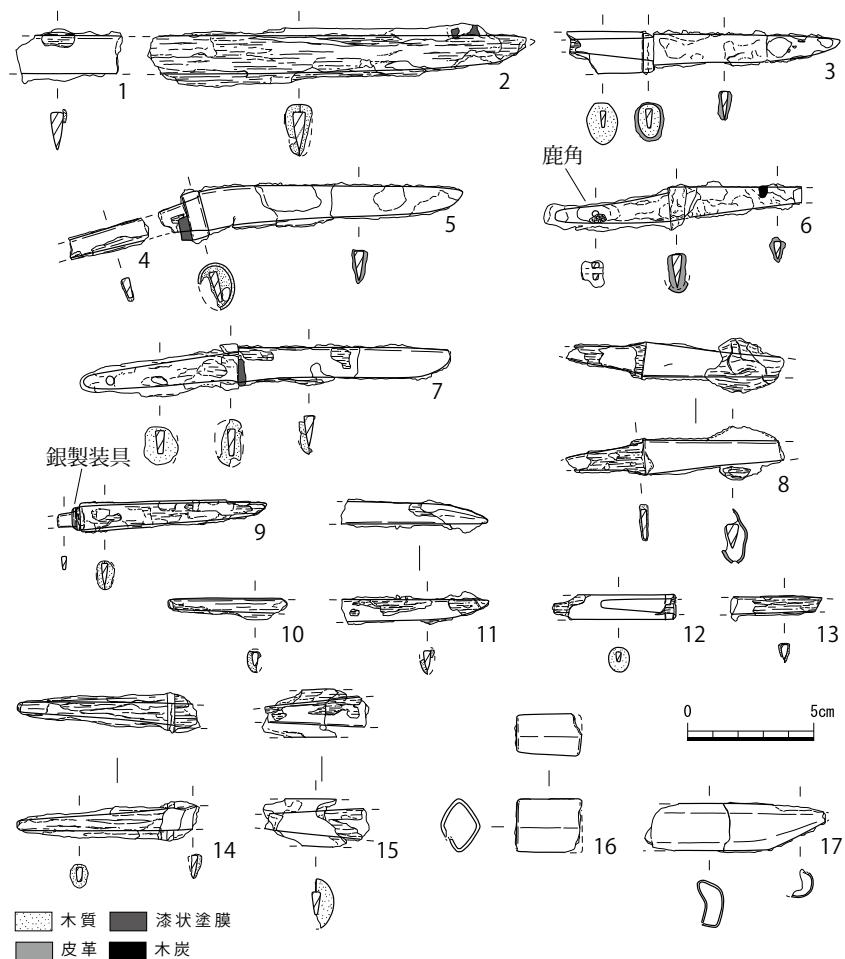


図4 飛鳥寺塔心礎出土刀子（石橋ほか 2016）(S=1/3)

鳥寺出土刀子の大部分は日本列島内で製作された可能性が高い（石橋ほか 2016）。

(4) 耳環

材質から銅芯鍍金製9点（5セット）、捩りを加えた銅芯鍍金製4点（2セット）、銅芯金張6点（3セット）、銅芯鍍金銀張2点（1セット）、銀芯金張1点（1セット）、銅製7点（4セット）、計29点、16セットの耳環が出土しているが（図5）、原位置を保って出土したのは心礎上面西南隅から出土した4点に留まる（図5-1～4）。

出土耳環の大半を占める銅芯耳環については6世紀中葉を境にして、直径3cm前後、太さ6mm以上の「大型耳環」が現れ、7世紀前半になると小型化するとともに、断面の楕円形化が顕著となることが指摘されている（辻村 1997）。飛鳥寺出土耳環の多くは辻村氏の「大型耳環」に該当し、古墳時代後期後半に日本列島内で製作・流通していたものとみられる。百濟の王興寺舎利莊嚴具にも耳環が含まれているが、鈴や心葉形といった垂下飾をもつ耳飾を含み、耳環は中実金張が約10点（うち1点は蛍光X線分析によって、銅芯であることが確認されている）、銀製が8点あり、いずれも太さ約3mmと細い。飛鳥寺出土耳環の中にも同じような特徴をもつものがあり、とりわけ銀芯金張の図5-12については百濟製の可能性も考慮すべきであろう（石橋ほか 2017）。

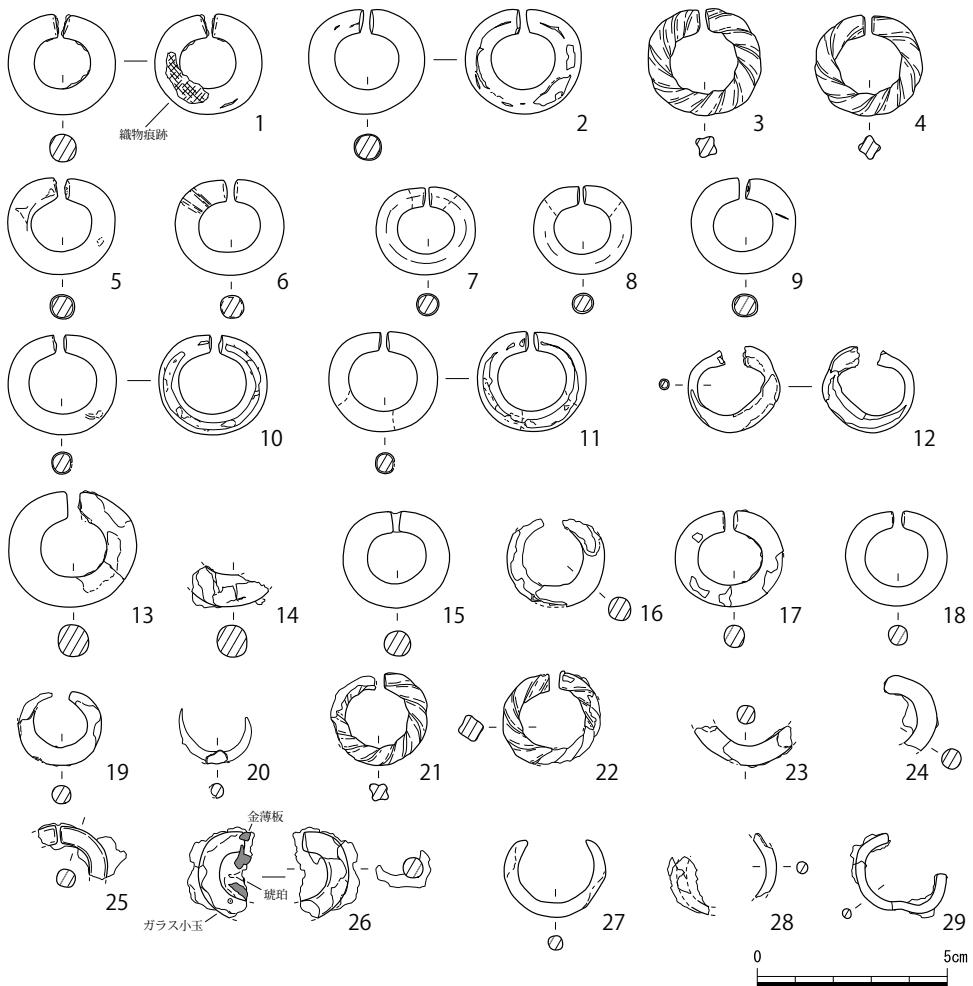


図5 飛鳥寺塔心礎出土耳環（石橋ほか2017）（S=1/2）

（5）金・銀製品

金延板7点、金粒1点、銀延板5点、銀粒7点が出土しているが（図6）、原位置を保って出土したものはない。非破壊調査による蛍光X線分析がおこなわれ、材質にいくつかのパターンが認められることが明らかとなっている（諫早ほか2018）。

舍利埋納儀式において金製品や銀製品を埋納する事例はインドにまで遡り、中国南北朝時代に百濟を経て日本列島へ伝わったものとみられている（原田2010、向井2023など）。まったく同じ形態のものはないが、百濟の王興寺舍利莊嚴具や弥勒寺舍利莊嚴具の中にも金や銀の延板が含まれており、金製品の中には飛鳥寺出土金延板と同じような値を示すものが一定量存在する（国立扶余文化財研究所2009、国立文化財研究所2014）。同時期の古墳副葬品にはみられないこれらの金銀の延板や粒が、舍利とともに百濟からもたらされた可能性は十分ある。

（6）雲母

石橋茂登氏によって鎌倉時代の発掘坑埋土の最下層（心礎直上）から出土した雲母片（総重量1gほど）の全容が紹介されている。日本列島内の古代寺院に雲母を埋納する事例はみられないこと、日本列島を含む古代東アジアで墳墓に雲母を埋納する事例が散見され、神仙思想や道教と関連付けられ

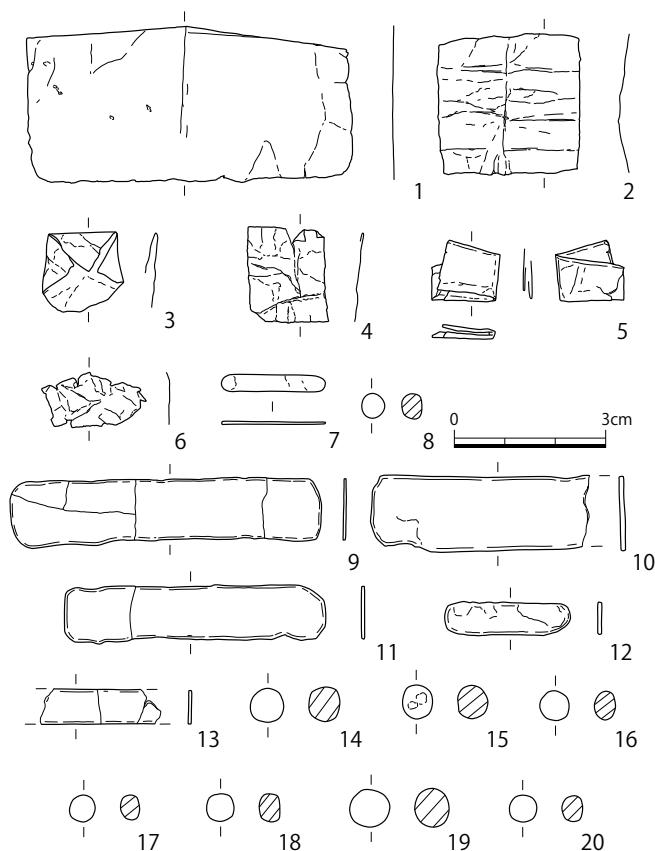


図6 飛鳥寺塔心礎出土金・銀製品
(諫早ほか 2018) (S=2/3)

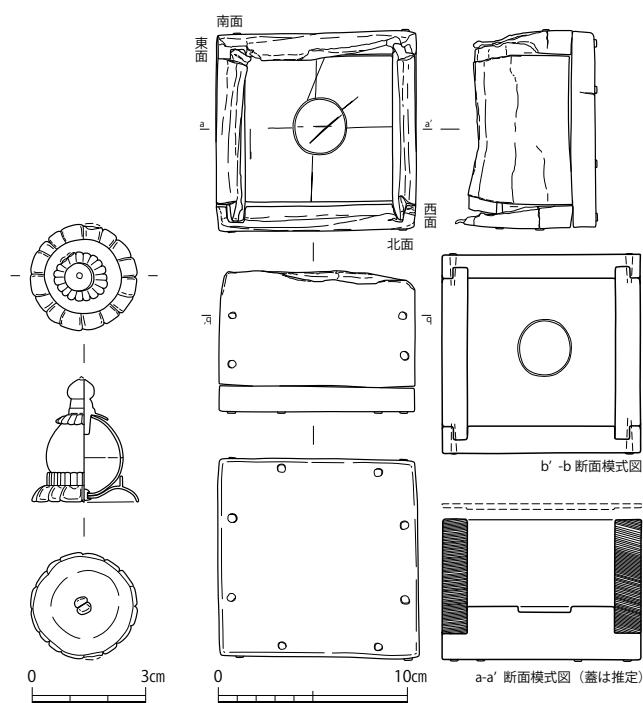


図7 飛鳥寺塔跡出土舍利容器 (石橋ほか 2024)
(舍利内容器: S=1/2、舍利外容器: S=1/4)

ていることを指摘した上で、百濟の王興寺舍利莊嚴具の中に雲母製の花形装飾品を取り付けた鉄芯有機質製の冠帽が含まれることから、百濟との密接な関係を想定している(石橋 2021)。ただし、現状ではいずれも破片資料であり、もともとの形態を把握することは難しい。

(7) 鎌倉時代の舍利容器

現在、鎌倉時代に新造され、石櫃に埋納された金銅製の舍利内容器(図7-1)と木製の舍利外容器(図7-2)について、X線CT撮像、蛍光X線分析、樹種・年輪年代や美術史的検討などを含む基礎的調査が進められている。とりわけ注目されるのは村田泰輔氏によるX線CT撮像によって、舍利内容器の内部に最大長径が5mm程度から1mm程度の小片もしくは破片が多数存在し、その形状から1)円環状のもの(図8-a、直径1.8mm)、2)構造の一部が極端に薄く(細く)、かろうじて円環状になっているもの(図8-b、直径3.2mm)、3)U字のもの(図8-c、3.0×2.8mm)、4)円筒状が潰れたもの(図8-d、1.7×1.3mm)、円環状の一部を構成するような不定形の筒状のもの(図8-e、長さ2.0mm)、0.5~1.1mm程度の破片状の小片(図8-f、0.6×0.4mm)に大別されたことである(石橋ほか 2024)。舍利内容器の身と蓋はぴったりとはまっており、中を直接目視することができず、報告書作成時に撮影されたアイソトープ画像(奈良国立文化財研究所 1958: PL.59-4)で、舍利数粒の存在は確認されていたものの(坪井 1964)、その内容物をうかがう術はこれま

でまったくなかった。

これらの中で、少なくとも円環状を呈する a についてはサイズからみて塔心礎埋納品にみられるガラス小玉の可能性が高く、b、c、e についても形状からみてガラス小玉の破片の可能性がある。塔心礎埋納品のガラス玉類が創建当初の埋納物とみられることは、先に述べた通りである。一方、d や f のように孔をもたない資料も存在し、f についてはガラス小玉の破片の可能性もあるが、d から舍利内容器に玉類以外も含まれていることは確かである。村田氏によればこれらの内容物の ROI 区分帯による物質密度は 3 種に区分されるが、その差は漸移的であり、ガラス小玉とみられる a はその中間に位置する。すなわちガラス小玉と近似した物質密度をもつ d や f についてもガラス製品ないし、ガラス製品の原材料である石英のような鉱物の可能性が想定され、これらの中には舍利そのものが含まれている可能性も考慮すべきであろう。

石櫃の中から舍利容器以外に明らかな鎌倉時代の遺物が出土していないことをふまえれば、これらの内容物についても創建当初の舍利、舍利莊嚴具の一部が再埋納された可能性が極めて高い。なお、内容物の調査については現在も継続中であり、最終的な評価はそれ待って改めておこないたい。

4. 飛鳥寺塔心礎埋納品研究の課題

ここまで、飛鳥資料館を中心に進められてきた個別器物に対する悉皆的な基礎資料化作業で得られている最新の知見について紹介した。ここからは、以上のような現状をふまえた上で、今後に残された課題を三つ指摘しておきたい。

一つ目の課題は飛鳥寺塔心礎から出土したすべての遺物の基礎資料化である。いまだ基礎資料化の果たされていない器物の中には札甲や砥石、各種金銅製品など飛鳥寺塔心礎埋納品を考える上で欠くことのできないものが含まれている。その中には札甲のように「飛鳥寺型」（内山 2006 など）として基準資料に位置づけられながらもその全容が明らかでない資料もあれば、創建期舍利容器のように報告書刊行後にその存在が指摘されながらも詳細が明らかでない資料もある。遺存状態が極めて良好であるがゆえに通常の実測による図化が困難であった前者については、三次元計測データをもとにした図化が進められており、後者についても大量に出土している破片資料を含めた各種金銅製品の悉皆的な基礎資料化と個別器種の抽出作業が現在進行中である。

とりわけ飛鳥寺塔心礎に当初埋納された舍利容器がどのようなものであったかは、百濟を通じて倭国に伝えられたと史書の記す仏教受容の実態を考える上で極めて重要な問題である。塔心礎には方形

舍利孔（一辺 30cm、深さ 20cm）とその東壁に掘られた龕（幅・奥行 12cm）という 2ヶ所の舍利容器埋納空間があり、『本元興寺塔下掘出御舍利縁起』の記載からみて、それぞれ舍利容器が埋納されていた可能性もあるが、同縁起の「御舍利其数百余粒ならびに金銀器物」という記載から、少なくとも一つは王興寺木塔と同じ金—銀—銅の三重構造であったのだろう。飛鳥寺塔心礎埋納品には金製や銀製の容器類の存在は確認されておらず、上原真人氏の指摘するようにそれらやその内容物（舍利）の多くは飛鳥寺塔跡に再び埋納されることなく、「由緒ある舍利として、どこか室内や堂内で礼拝された」とみられる（上原 2004・2023）。また、鎌倉時代に新造された金銅製舍利内容器については、同時期に類例のない器形であり、創建当初の舍利容器がイメージされている可能性が三田覚之氏によって指摘されている（石橋ほか 2023）。これまでまったく想定されてこなかったが傾聴に値する指摘であり、仮にそうであったならばその模倣対象はかつて猪熊兼勝氏（1990）によって紹介された直径 5.6cm、高さ 2.6cm の銅製鏡蓋片ではなく、未知の金製舍利内容器であろう。いずれにせよ飛鳥寺塔心礎に埋納された舍利容器は、倭国に舍利を伝えた百濟で近年みつかっている舍利容器とは、まったく異なる形状を呈している可能性が高まってきた。

二つ目の課題は舍利が埋納された正月 15 日（A）に伴う埋納品と、翌日 16 日の心柱の立柱後（B）の埋納品の区分である。調査時の記録と現在の保管状況から両者を厳密に区別することが困難であることは先に述べた通りであるが、個別器物に対する悉皆的な基礎資料化が進展したことで、一定の見通しをもって、両者の峻別を試みることが可能な状況となりつつある。たとえば、鎌倉時代の発掘坑埋土から出土した I - ③については、建久の発掘時の取りこぼしとみるべきであろうが、石櫃内やその中に安置された木製舍利外容器から出土した I - ④については、金銅製舍利内容器に創建期の舍利が一部とはいえ納められている可能性が出てきたことをふまえれば、その多くは本来、舍利孔に納められていた舍利荘嚴具であった可能性が高い。また鎌倉時代の発掘坑の最下面から出土した I - ②についても、本来は心柱が立っていた位置から出土していることをふまえれば、鎌倉時代に塔跡を埋め戻す際に、心礎上面で何らかの儀礼がおこなわれた痕跡である可能性もあり、I - ①と共に通する品目以外はやはり舍利孔に納められた舍利荘嚴具の可能性が高いといえよう。

以上をふまえると、B のタイミングで埋納されたことが確実な I - ①（これを 1 群とする）以外の原位置を保っていない器種について、B のタイミングで埋納されたものを確実に含み、A のタイミングで埋納された可能性の高いものも含む一群（2 群）と、B のタイミングで埋納された形跡が発掘調査では確認できず、A のタイミングで埋納された可能性の高い一群（3 群）に大別することが可能である（表 4）。このような筆者の想定が妥当であれば、心柱周辺に安置された B の埋納品には舍利孔に納まらない大型品が多いことに加えて、耳環や刀子のような参列者の供献品とみられる身体着装品が主体を占めるのに対し、心礎舍利孔に埋納された A にはそういった供献品とみられるような器物を基本的には含んでいなかった可能性が高い。飛鳥寺塔心礎埋納品の構成についてはインドに起源する仏舍利埋納本来のあり方がかなり忠実に再現されている可能性が指摘されているが（向井 2023）、このような飛鳥寺塔心礎で認められる埋納の位置やタイミングの違いは、仏舍利埋納儀式において各

表4 飛鳥寺塔心礎埋納品の埋納位置復元案

群	器種	抽出資料	埋納位置	埋納のタイミング
1群	札甲、馬鈴、蛇行状鉄器、大型砥石	I-①	心礎上面	B（推古天皇元年正月16日）
2群	耳環、刀子、円形打出金具、杏葉形打出金具、ガラス小玉ほか	I-①～④	心礎上面？	B（推古天皇元年正月16日？）
3群	玉類、雲母片、金・銀の延板・小粒、歩搖、金銅鈴、琥珀片ほか	I-②～④	舍利孔？	A（推古天皇元年正月15日？）

種舍利莊嚴具の埋納に込められた意味が一様でなかったことを強く示唆する。

三つ目の課題は月並みではあるが個々の器種の系譜、製作地の追究である。先にみたように耳環の大部分や刀子については、日本列島で製作された可能性が高い。ヒスイや瑪瑙、碧玉などの石製玉類や、藤ノ木古墳副葬品にもみられる打出金具などもこれに加えてよく、加耶系の馬具も製作地については日本列島とみてよいだろう。これらに対して、明らかに百濟系、さらには百濟製といえるものは、実のところまだほとんど見いだせていない。一部のガラス小玉については百濟を経由した可能性が指摘されており、金・銀の延板や小粒についても百濟からもたらされたとみてまず間違いないのであるが、それらは百濟に限らず仏舍利埋納に共通する器物である。平安時代後半に編纂された『扶桑略紀』の「刹柱を立つる日、嶋大臣ならびに百余人みな百濟の服を着す。観る者ことごとく悦ぶ」とあり、別の書物には「皆髪を辯け百濟服を着る」と、蘇我馬子をはじめとする参列者が髪形まで百濟風であったとするが、少なくとも王興寺や弥勒寺の舍利莊嚴具にみられるような百濟の冠帽や鎧帶は、飛鳥寺塔心礎埋納品にはみられない。かねてより日本列島以外では高句麗にのみ類例があることが指摘されてきた札甲（内山 2006 など）が確かに高句麗製ならば、『日本書紀』などの記載にもとづいて飛鳥寺の造営を百濟国—倭国の二国間関係に求める既往の理解に一石を投じることになるだろう。

以上に挙げた三つの課題は、飛鳥寺塔心礎埋納品の悉皆的な基礎資料化を必須とする点で相互に連関している。

5. おわりに

課題はいまだ山積しているとはいえ、多くの研究者の参画のもとに進められてきた飛鳥寺塔心礎埋納品の再整理作業によって、日本列島最古の舍利埋納儀式の様子がおぼろげながら浮かび上がってきた。『日本書紀』には敏達天皇 14 年（585）に蘇我馬子が大野丘の北に塔を建て、舍利を柱頭に安置したという記事がみられるが、依然として飛鳥寺以前はもちろん、同時期の舍利莊嚴具が日本国内で発掘調査されたことはない。飛鳥寺塔心礎埋納品が日本列島における仏教の受容を考える上で、これ以上にない重要な資料であることは、誰の目にも明らかである。再整理作業はまだ道のりなればではあるが、早期にその全貌を多くの人々と共有できるよう、これからも微力ながら力を尽くしたい。

付記

本稿は 2023 年 11 月 5 日に和歌山県立紀伊風土記の丘でおこなわれた特別展シンポジウム「律令国家成立前夜」における講演内容をもとに成稿したものである。また本稿には JSPS 科研費 23K21991 「古墳・副葬品の

多角的検討にもとづく日本列島初期仏教受容史の再構築」の成果を一部含む。

註

(1) 前稿(諫早2015)では、京畿道漣川郡無等里2堡塁から2点の蛇行状鉄器が出土していると紹介したが、その後刊行された正式報告書(서울대학교박물관2015)においていずれも構造上、鞍に固定する寄生(蛇行状鉄器)にはならず、木製柄に装着して用いる吊籠形鉄器(망태형 철기)として報告されたため、本表には掲載しなかった。なお表を更新するにあたっては梁時恩、権度希、西幸子の諸氏よりご教示をえた。ご厚情に深く感謝したい。

参考文献 (PDFが機関リポジトリなどインターネット上で公開されているものには末尾に*を付した)

東 潮 2011「蛇行状鉄器再考」『勝部明生先生喜寿記念論文集』

諫早直人 2015「飛鳥寺塔心礎出土馬具」『奈良文化財研究所紀要2015』*

諫早直人 2017「飛鳥寺の発掘と塔心礎埋納品」『飛鳥・藤原京を読み解く 古代国家誕生の軌跡』クバプロ

諫早直人・石橋茂登・田村朋美 2018「飛鳥寺塔心礎出土金・銀製品」『奈良文化財研究所紀要2018』*

石橋茂登 2021「飛鳥寺塔心礎出土の雲母」『奈良文化財研究所紀要2021』

石橋茂登・諫早直人・大河内隆之 2016「飛鳥寺塔心礎出土刀子」『奈良文化財研究所紀要2016』*

石橋茂登・諫早直人・降幡順子 2017「飛鳥寺塔心礎出土耳環」『奈良文化財研究所紀要2017』*

石橋茂登・諫早直人・村田泰輔・田村朋美・星野安治・三田覚之 2023「飛鳥寺塔跡出土舍利容器」『奈良文化財研究所紀要2023』

石橋茂登・諫早直人・横白彩江・守田 悠・村田泰輔・三田覚之 2024「飛鳥寺塔跡出土舍利容器の調査」『奈文研論叢』第4号 奈良文化財研究所

石橋茂登・木村結香 2018「飛鳥寺塔心礎出土蛇行状鉄器の復元的研究」『奈良文化財研究所紀要2018』*

石橋茂登・田村朋美 2016『飛鳥寺跡出土遺物の研究 ガラス玉類の考古科学的研究』飛鳥資料館*

猪熊兼勝 1990「飛鳥寺の舍利容器」『仏教芸術』188 毎日新聞社

上原眞人 2004「仏舍利信仰の日本の展開」『かにかくに』(八賀晋先生古稀記念論文集)

上原眞人 2023「飛鳥寺仏舍利の行方」『何が歴史を動かしたのか』第3巻 雄山閣

内山敏行 2006「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』Vol.7 古代武器研究会

岡本敏行 2010「日本古代における仏舍利の奉安」『古代東アジアの仏教と王権 王興寺から飛鳥寺へ』勉誠出版

国立文化財研究所 2014『益山弥勒寺址石塔 舍利莊嚴』*

国立扶余文化財研究所 2009『王興寺III』*

鈴木靖民(編) 2008『古代東アジアの仏教と王権 王興寺から飛鳥寺へ』勉誠出版

서울대학교박물관 2015『漣川無等里2堡塁』

田村朋美 2017「飛鳥寺塔心礎出土の真珠製小玉」『奈良文化財研究所紀要2017』*

辻村純代 1997「耳環考」『古文化談叢』第39集 九州古文化研究会

坪井清足 1964『飛鳥寺』中央公論美術出版

奈良国立文化財研究所 1958『飛鳥寺発掘調査報告』

原田一敏 2010「日本古代の舍利容器と鎮壇具」『古代東アジアの仏教と王権 王興寺から飛鳥寺へ』勉誠出版

降幡順子・石橋茂登・中川あや 2018「古代寺院址出土銅製品の非破壊調査」『奈良文化財研究所紀要2018』*

向井佑介 2023「仏塔と仏舍利の東伝」『アジア仏教美術論集 東アジアVII アジアの中の日本』中央公論美術出版